

仁齋が如何に獨創的精神に燦えながら學界を指導し、讀否兩論の渦を卷渦しつゝ、日本儒教に學的諸歸關を惹起し、古義學に附隨する復古精神や實證主義的精神が、同學派・異學派に如何に大きな影響を與へ、博物學・復古醫學・歴史・梵文等の研究を進展せしめる上に如何に重要な役割を果たしたか、より重大な觀點ではなかつたらうか。又(第十三章)以下、東所より後の學問と教育の敘述方法に就いてあるが、それは前期に比して可成の變質が來てゐる筈であり、それを歴史的背景の推移との相關性に於て考へられることの中に、學問が社會的に生きるか死ぬかの蹊が預けられてゐるやうに考へられるのである。

以上甚だ藩越な言辭を弄し、自己の立場を以て付度を恣しいまゝにした罪は消ゆべくもないが、ひとへに著者の寛容を冀ふ次第である。その研究領域の大部分は未だ何人も着手しなかつた未開の原野であり、十數年排作整理の勞を思へば瑕瑾の如きは問ふを要しない。正確な實證的礎石の一個と雖も後進者が安心して踏まへ得る據點たらざるはない。勿論著者を驅つてこれ程の大勞作を完成せしめたものは、單なる理性のみの仕業ではなく、大いなる教育愛・古義堂への深き思索・著者の研讀信奉淺からざる報徳の教へ等から流れ出づる情熱の然らしむる所であらう。全篇氣魂に充ちた文字は、讀む者に深い感動を與へずんばおかぬ。卷を覆ふて、仁齋に於て學問と教育の相即し融合した眞の姿を感得せざるを得ない。(菊版本文八三三頁、附録七六頁、コロッタイプ寫眞六

葉、東京目黒書店發行、定價九圓)(龜井伸明)

中世南島通交貿易史の研究

小葉 田 淳著

著者が日支中世貿易史に關して令名高く、續々として精細な新研究を發表されつゝあるは世の識る所である。本書は斯の廣泛な研究領域の中、主として琉球を擇び、これと日本本土、明、南海との通交貿易史について纏上げられたものである。従つて單に書題より連想される如き、既發表の論文集の様なものではなく、題目の配列については篇章節等に分けられて組織を持ち、試論的といはむよりは大成されたものとしての意味を有してゐる。尤も其の中には既に世に問はれた論稿も少くはないが、それとても多少の改訂が加へられて本書全體の構想の中に組込まれて居り、他は新たに起稿されたもので、量からいへば全體の三分の二に及んでゐる。

著者の態度には凡ゆる問題に就いて事實を可能なるだけ多く搜り、これを興奮に援用せむとする實證的意圖が看取され眞摯な學的探究心と倦まざる努力とは敬服に堪へざる所である。中世南島貿易史の史料的研究は著者のそれに悉きたる感をさへ懐かしめるものがある。

たい一見して種々の事實があまりにもゆたかに擧げられてゐたのに讀者をして理解を困難ならしめ、従つて結論的なもの、抽出が容易でないといふ感を起さしめ易い。然しながらそれは本書を

精讀せざるもの、皮相な觀察に過ぎないであらう。

概観的發展的要約が少ししか試みられてゐないのは讀者をして思考の餘地を持たしめる爲と想像される以外に、著者には既にかかる要約的なものが常に前提としてまた結論として意識されてゐることを否定出来ない。本書を味へばこの事は自ら窺ひ得る所である。以下偏見に互るかも知れないが、内容の概略を紹介する。兼ねて本書を讀む參考ともなれば幸甚である。

本書は分つて三篇となし、第一編は日本本土と琉球との關係、第二編は琉明關係、第三編は南海交渉に琉球と暹羅との關係を扱つてゐる。第一編では足利幕府と琉球の通交及び附帶貿易が扱はれ、その形態及び經過が省られ、應仁文明大亂による内國海運殊には琉球船の近畿往易の衰頽と、それに反して九州貿易の一層の興隆が述べられてゐる。本來幕府は琉球を附庸視する政治的態度を有し、嘉吉頃には一方的に琉球を島津氏の封土と爲し、其頃から本土の渡航商船は島津氏の許證を要することとなつた。この關係が島津氏の政策として、強化され遂に慶長に及んで征調役となる。終りに琉球本土間の貿易が要約されてゐる。

第二編琉明間の通交貿易は史料的に豊富な問題であるばかりでなく、琉球の仲繼貿易の中樞を爲すものであるから詳細に分析研究された。先づ中山王察度以來尙永に至る間の渡航船即ち進貢船の數を明らかにし、尙眞以來現はれた接貢船、迎接船等の起源性質船數等が考察されてゐる。次に使船についてははじめ明よりの撥與であつたが、正統年頃より福建船廠で造る様になり、尙情以

降琉球で造るに至つたとせられる。兼貞の構成法と變遷殊に閩人後裔の所與關係も省られ、携行文書の性質半印勘合の時代性が論ぜられてゐる。明の制度については琉球使臣の行歴と、これに對する明の施設、待遇等が變遷的に考へられ、琉明貿易では進貢物とこれに對する頒賜物の内容と變遷、又本來は貿易の根幹的のものとして附塔貴收買の全貌があつづけられ、會同館市と福建の牙行貿易が記される。また明末多量の銀が輸出せられたが、これは琉球本土間の經濟的的關係にも聯繫あることが注目された。明の通交貿易では冊封使渡來の經過年月に關し、在來知られた所を訂正し、明商船の海外通商發展中福建漳泉地方の研究は從來の範圍を出で、闡明されてゐる。

第三篇南海通交貿易は明代の通交貿易形態の國によつて異なることを研究せんとて暹羅が取上げられてゐる。その中廣東に於ける商船の容認、抽稅制の沿革など注目すべき研究である。また琉暹貿易も相當盛なもので、南海諸國間では最も長期に互つたことを論ぜられた。なほ應永十五年小濱、來着同二十六年薩摩來着の南蠻船は學者の議論ある所であるが、殊に後者については歷代寶案所收文書により舊港即ちスマトラのバレンパンの船なりと斷ぜられ、從來殆んど定説たるの觀あつた爪哇船説に反對せられたのは卓見といふべきであらう。また舊港と琉球との交渉、次で滿刺加と琉球の往易等についても詳論されてゐる。而して最後の索引は南島通交貿易史を大成せる本書の内容に相應はしきもので、利用價値はこれによつて一層昂められるであらう。(菊判本文五

三八頁、索引一四頁、圖版一四葉、表三葉、日本評論社發行、定價五圓五拾錢）〔福尾猛市郎〕

支那地方自治發達史

和田 清編

本書は東大教授和田清博士が中華民國法制研究會（會長松本恣治博士）の委嘱により昭和十三年春以來約一年半の日子を費して完成されたものであり、資料の蒐集や本文の起草は松本善海・中村治兵衛兩氏の努力に成り、博士自ら手を下されたのは序説及び第一章であるといふ。

支那では古來ピラミッド型の官僚制度が王朝の專制君主の下にきづかれてゐるが、その最低位の知州知縣——所謂親民官より更に下に進むならばそこには上方からの組織と異つた系統の、しかも矢張り專制主義的な民間自治制度が構成されてをり、その内村落が最重要な基本的組織であつた。一般人民と政府との關係はこの自治體を経て人民からの租税の貢納と政府からの治安維持の二方面に於て存立するに過ぎない。かゝる村落自治體は王朝の幾度かの興廢による上部の擾亂にも係らず過去の支那を通じて恒久的に保存されてきた。

殆んどすべての史料が朝廷の記録や治者階級の筆すさびである支那においてかかる下方からの組織を究明しその歴史的變遷を考へる企ては實に困難といはねばならない。然も本書は上方からの地方制度や特に徵稅組織を手掛りとして下方の自治組織を把握す

ることによつてこの荒塗を開かんとする。本書の目次は左の通りである。

序説、第一章 隋唐以前の時代、第二章 宋代、第三章 元代
第四章 明代、第五章 清代、第六章 民國時代、附錄 資料篇
序説に於ては資料豊かな宋代以後を主とし特に制度の歴史的變遷及び地方行政組織との關聯に重點をおくといふ編者の目的が述べられ、第一章では漢代の郷亭の職が秦漢以來晋宋まで存続したが、北魏の三長制施行以後變化し北齊・北周より隋に至り、周禮の理想案の實際的影響をうけつゝ、唐の坊村里正の基を開いたことを述べ、最後に新しい見解として、隋の郷官廢止が古來の自治制を衰微させたといふ通説を否定し、強大な權限を有した上代の郷亭は官治といふべきで、隋唐の治安と收稅とを目的とする微力な制度が、却つて眞の自治制の發足した所であるといふが單に言及に止つてゐる。

第二章以下は各王朝に區分してその地方行政の最下級單位にしてかつ官治補助機關である村落自治體の變遷を跡づけんと努力してゐる。第三章宋代では役法と村落自治の關聯をのべ、王安石が募役法を設けてから戸長の如き鄉村自治機關が官治機關にかはり、新たに隣保を擴充した保甲法が農村の治安を維持したが保甲にも主戸が軍事訓練に當る教閱保甲と主客戶ともなる自衛團たる不教閱保甲とがあつたが、南宋に及び後者は行政單位制度たる保伍法となり、外に村民の教化互助機關たる郷約や救荒のための社會が生じた。第三章元代ではこの頃支那の村落の地方的差異が著し